

英米文学と日本文学の怪奇小説の比較研究

金井 公平

A Comparative Study between English and Japanese
Weird Stories

KANAI Kohei

幽霊物語というジャンルに関しては、伝統的な英国の幽霊物語を読み慣れた読者には、カナダはあまり可能性に満ちた国とは思えないであろう。廃墟と化した城も、血に飢えた王族も貴族もないのである。しかし民間伝承の亡霊や妖怪の話となると、広大なカナダのすべての地方に渡って豊富に存在している。幽霊船は今だに5大湖を航行しているし、燃えるスクーターが港町を訪れる。亡霊は・北部の森林地帯にある古い伐採場に出現し・また大草原の古代インディアンの墓を守ろうと姿を現す。これらの幽霊船や亡霊にまつわる話は、いまでもカナダ東部のニューファウンドランド島から西部のバンクーバー島にいたる広大な領域で、夏の暗く静かな夜、キャンプファイヤーのまわりで語りつづけられているのである。さらにひとりでに明かりがついたり消えたりする家や、勝手に開いたり閉まったりする窓やドアなどの超常現象、現代版民間伝承といえる新しいタイプの話も数多くある。しかしカナダの民間伝承には、単なる逸話、断片的な話、夜間に一瞬垣間見た光景などが多いのである。それらの中で完成度の高い話は原住民の伝説であり、口承で語り伝えられたものであるが、文学的にも価値があるといえるのである。

ごく短い一例として、サスカッチワンのある谷の伝説がある。ある晩インディアンの勇士がカヌーで川を旅し

ていると、彼は誰かが自分の名前を呼ぶのを聞く。「呼んでいるのは誰だ」と尋ねるが答えはない。ふたたび名前を呼ぶ声を聞き、勇士もまた「呼んでいる...のは誰だ」と問い掛けるが、やはり答えはない。翌日村に帰ると、彼はフィアンセが前の晩に病気で死んだことを知る。フィアンセは死ぬまえに心も張り裂けんばかりの声で彼の名を2度呼んでいた。勇士は悲嘆のあまりカヌーに乗りいずこにか行ってしまう、2度と姿をみせることはなかった。しかしそれ以来、その谷の川を旅している者は、ときとして「呼んでいるのは誰だ」という声が、谷に響き渡るのを聞くのである。

フィクションの幽霊物語もカナダの作家により書かれているが、それらを読むと亡霊は必ずしも牢獄にいて、鎖をがちゃがちゃいわせたり、19世紀的なステレオタイプ化したやり方で古い館に出没するばかりではなく、北極の無人のキャビンや現代的な病院に出現したとしても、十分に読者の心胆を寒からしめることが可能であることが分かる。本年度は、カナダの幽霊物語を、フィクションに限らず民間伝承を含め、広く調査することに力点がおかれたが、次の段階として日本の幽霊物語との比較、たとえばアイヌの口承文学に伝わる怪奇譚との比較などができればと考えている。